

対馬丸の悲劇と今日

8月25日



小中学校の生徒で「ひめゆりの塔」は知っているも、
「対馬丸」について知っている人はどれほどいるだろう
か。

沖縄の集団疎開の学童らを乗せた「対馬丸」が米潜水
艦の魚雷で撃沈され 1500 人近くが犠牲になった昭和 19
年 8 月 22 日、今年で 70 年になった。

さすがに、内地の一般紙にも取り上げられたが、どこ
までその悲劇の実相に迫っているか。

地元紙沖縄タイムスは社説でその実相に迫っているが、
子供や女性を疎開させる真の狙いは、安全な場所への避

難ではなく、軍の食料確保や戦闘の足手まといになる点にあった。

さらには撃沈に嚴重な箝口令（話すな）が敷かれたことも伝えている。まさに軍の論理（軍策）が優先されたわけで、この点を見逃してはならない。

70年経ても児童の顔が浮かぶという遺族や生存者も高齢者となった。引率の元教師は「先生、助けて」という教え子の叫び声が今も耳に残るといふ。

10年前に那覇に開館した「対馬丸記念館」には10歳前後の子供たちの遺影が並んでいる。闇の海に消えた小さな魂を偲んで、近くの慰霊碑「小桜の塔」にたたずむと、その悲しみと無念さが一層伝わってくる。

大切なことは、平和を声高に叫ぶことより、過去に何があったかを忘れないこと、その実相を語り継ぐことであろう。

今、沖縄は「抑止力」という名の下、辺野古移設問題と知事選で沸騰している。その争点は、70年前の対馬丸の悲劇とつながっている。

沖縄国際大学の集中講義を終え、
「対馬丸記念館」にて思うこと



慰霊碑「小桜の塔」